

## COP10生物多様性交流フェアへ出展ーサンゴ礁再生技術ー

沖縄支社 藤原 秀一(執行役員)、国土環境研究所 生態解析グループ 勝越 清紀

生物多様性条約第10回締約国会議COP10会場における生物多様性交流フェアにおいて、当社のサンゴ礁保全技術の紹介を行いました。

※本技術紹介のブース出展は、社団法人海外環境協力センター(Overseas Environmental Cooperation Center)の会員企業として実施いたしました。

### はじめに(COP10会議について)

2010年10月、わが国を議長国とした生物多様性条約(CBD)第10回締約国会議(COP10)が、名古屋市において開催されました。条約に加盟する179の国々、国際機関、NGOから13,000人以上もの参加があり、今世紀最大級の国際会議となりました(写真1)。

今回の会議で、採択を目標とした主な議題は以下でありました。

#### 1) 遺伝資源へのアクセスと利益配分(ABS)に関する名古屋議定書

※遺伝資源提供国の遺伝資源を利用して利用者が利益をあげる場合に、その利益の一部を提供国に分配するためのレジームを国際的に合意するもの

#### 2) 2011年以降の新戦略計画(愛知目標)

※生物多様性条約の新たな世界目標となる新戦略計画(ポスト2010年目標)の採択。急速に悪化する生物多様性の状況を改善するため、野心的であり現実的な目標を設定するもの。

(出典:環境省報道発表資料 生物多様性条約第10回締約国会議の開催について(結果概要))

採択をめぐり、資源提供国と利用国の意見対立は深刻であったものの、議長である松本環境大臣が最終日に議長提案を各締約国に提示し、緻密な調整により上記議題について締約国の合意を得ることに成功し、名古屋議定書及び愛知目標が採択されました。



写真1 COP10の会場となった名古屋国際会議場

### COP10生物多様性交流フェア

#### -Interactive Fair for Biodiversity-

熱気を帯びたCOP10会議会場(名古屋国際会議場)に隣接した白鳥公園では、両会議の開催と並行して、生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)併催屋外展示会-Interactive Fair for Biodiversityが10月11~29日の期間中に開催され、国内外の政府や自治体、国際機関、NGO/NPO、学術、企業などの200を超える多岐にわたる出展者が、生物多様性に関する課題や取り組みをブース展示しました(写真2)。会期中の来場者数は11万8千人(環境省発表)と、会議の注目度を裏付けるように大変多くの人々で賑わいました。



写真2 生物多様性交流フェア会場(白鳥公園)

COP10における主要な議題として、海洋と沿岸の生物多様性も主要な議題として取り上げられており、海洋生物資源についても、生物多様性に配慮して持続的に利用するための適切な措置をとるよう各国に促すことが決定されております。

本フェアにおいて、当社は社団法人海外環境協力センター(OECC)の会員企業として、サンゴ礁資源(生態的、経済的)の持続的利用の面から期待されている「サンゴ礁再生技術の紹介」及び「世界中で衰退しているサンゴ礁の現状についての展示・解説」を行いました。

### COP10生物多様性交流フェアにおける展示・解説

2010年10月26日、COP10生物多様性交流フェア展示ブースにおいて、「サンゴ礁再生技術の紹介」及び「世界中で衰退しているサンゴ礁の現状についての展示・解説」を行いました。当日は晴天に恵まれ、大変多くの方の御来場をいただきました。サンゴ類の白化現象は、最近マスコミでも多く取り扱われ、知名度の高い生物多様性の喪失問題となっています。当ブースにおいては、サンゴ類の再生技術及びサンゴ礁の自然に関する活発な質疑応答が繰り返され、大変充実した出展となりました(写真3)。



写真3 サンゴ礁再生技術紹介展示ブース

### 展示紹介 - 近年のサンゴ礁の衰退と再生の必要性 -

サンゴ類は、海水温の上昇によるストレスが要因といわれる白化現象や、天敵であるオニヒトデの大量発生、また沿岸開発による汚濁等により、近年世界中で減少し続けています(写真4)。サンゴ類の減少は、水産資源の減少や美しい海中景観を失うことによる観光産業への打撃といった経済的損失、天然の防波堤としての防災機能の低下等を招きます。沿岸住民にとってこれらは深刻な問題となり、生物多様性の喪失により人類がこうむる損失の代表的な例と考えられます。

沖縄、フィリピン、インドネシア、ミクロネシアの国々、オーストラリアといった広大な太平洋地域の他、カリブ海、インド洋等も同様の問題を抱えており、サンゴ礁の再生に関する取り組みは国際的な急務であります。



写真4 サンゴ類の白化現象(左)、オニヒトデによる食害(右)

### 展示紹介 - 着床具を用いたサンゴ移植技術の紹介 -

当社は着床具というユニークな道具を用い、沖縄県石垣島を中心として、荒廃したサンゴ礁の再生を目的とした、サンゴ礁の修復事業を環境省より受託及び自社研究しております。

沖縄近海では、サンゴ類は夏の大潮の夜に一斉産卵することが知られています。そこで、産卵の起こる前に着床具を自然の海底に設置し、サンゴの幼生の着生を誘導します。着床具に着床した幼生は、1~2年間の成長後に指先ほどの大きさのサンゴ種苗として、移植に用いることができます。この移植手法は、サンゴの一部を破壊して種苗を得る手法と異なり、種苗を卵から育成する環境に優しい手法です(図1)。

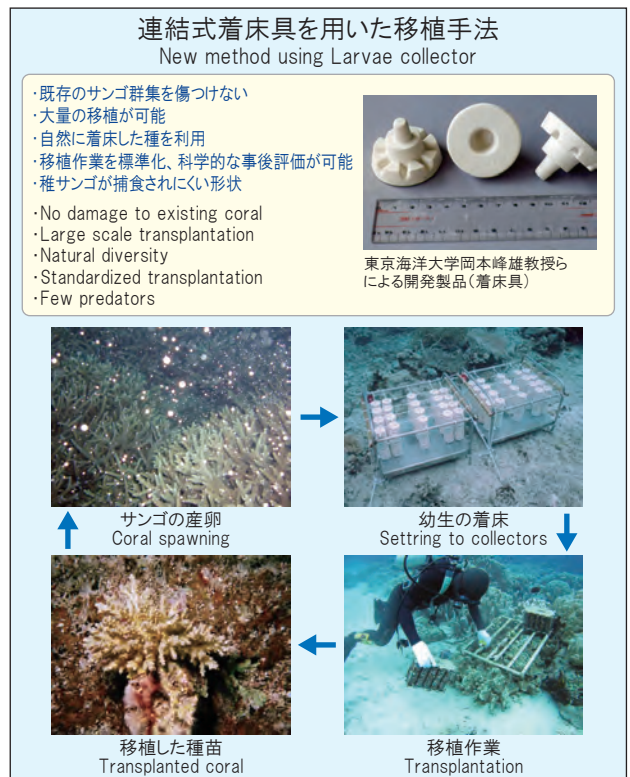


図1 着床具によるサンゴ礁再生技術

### おわりに

COP10において合意された2011年以降の新戦略計画(愛知目標)は、長期目標として「自然と共生する社会、すなわち、2050年までに、生態系サービスと健全な地球を維持し、全ての人に必要な利益を提供しつつ、生物多様性が評価され、保全され、回復され、賢明に利用される」、短期目標として、「生物多様性の損失を止めるために効果的かつ緊急な行動を実施する」ことを掲げています。私たちの技術が目標に貢献し、現地の発展に資するよう企業活動を展開していきたいと考えております。